

第十七章 方言矯正の原理

標準語を教へ込むべし、これは無條件に眞理である。方言を矯正すべし、これも正しい。ただし、この方にはある制限がある。第一、方言だけ存して、それに相當する標準語の無い様な言葉は方言矯正の範圍外である。農村には農業語彙あり、漁村には漁業語彙あり、山村には山林語彙あり、その外、年中行事・冠婚喪祭・衣食住等には、地方獨特の慣習・事物があり、従つて獨特の名稱がある。これらの名稱は、方言といふよりも、むしろ方物名といふべきである。即ち、先づ、物が違つて居る。名の違ふのは當然である。かゝる場合は外國語を翻譯する場合に最も多くぶつかる事である。西洋のスカートは日本の裳（カミ）とは譯し難く、西洋のボートは日本の傳馬船とは別である。行燈・火燭（カキ）子・鴨脚（カキ）子・ランプ・シャボン・ガラス等に至つては、それに近い物すら日本に無かつたのだから、原語をそのまま採用する外は無かつた。これが外來語である。五種不翻の不可避は、早く佛典を支那語譯する際にも認められた。五種不翻とは、（一）秘密の故に、（二）多義を含むが故に、（三）此に無き故に、

(四) 古に順ふ故に、(五) 善を生ぜんが故にである。此に無き故に翻譯不可能といふのは、方言と標準語との間にも有る。爐を中心とする田舎の生活と、アパート住ひの東京人の生活とでは、衣食住からして違つてゐる。土俗博物館に陳列されて居る様な田舎の労働着や道具の東京言葉を開かうとするのは無理な要求である。地方特有の食物をあさうとする程の食通は、必ず、まづその地方名を尋ねる事を怠らないだらう。職業人の半数が農夫である様な國がらにあつては、農業語彙を特殊の職業的術語として取扱ふわけには行かない。ハセ(稻架)ニオ(稻葉)サナブリ(田植上り)サビラキ(田植始)、これらの言葉は、成人した日本人の半分が始終口にして居る言葉である。残の半分がそれを知らぬといふ事は、米のなる樹を知らぬといふのと同じ種類の名譽でしかない。

都會の語彙は、ある方面では豊富であるが、ある方面では貧弱である。都會は必ず平野に發達する。だから、都會の語彙の中には、山や島や海岸に取つて必要な地理用語は缺けて居る。「萬葉集」には地理用語はかなりあるが、平安朝の文學となると急に少なくなる。平安朝時代になると、文學は、翠帳紅閨裡の生活者たる貴族の女流の手に移つたからである。「源氏物語」を読んだ人は、その地理的舞臺の餘りに狭いのに驚くだらう。一番遠い所が明石・須磨である。紫式部は寫實を重んじた人だから、見ぬ土地を、馬琴式に想像を以て描く事を敢てしなかつた。これを以て、紫式部自身の足跡の狭かつ

た事が思ひやられる。女ばかりではない、當時は男も用不精であつた。越中の守とか、土佐の守とか言つても、自ら任地に赴く者は稀で、大抵は代理をやり、自分は京都にあつて、歌などを作つてゐる。しかし、もとはさうではなかつた。「土佐日記」の著者は自ら土佐に赴き、船頭の言葉を開いて、それを日記に録して居る。大伴家持は自ら越中に赴き、漁夫の言葉を聞いて、それを歌に詠み込んで居る。一代ごとに都を遷した奈良朝以前にあつては、公卿殿上人といへども山河を跋渉する機會が多く、從つて山岳語彙も豊かであつたに違ひないが、後世それを忘れてしまつたのは惜しい事である。明治になつて、地理學が興るや、先づ地理の術語の翻譯に當惑し、應急的に生硬な漢語を濫造して間に合はせた。もし、地理學者が信州あたりの山地の言葉に通じてゐたら、これほど苦しまなくても良かったらうにと思ふ。近頃、登山が盛になつた結果、飛騨・信濃あたりの山岳語彙が都會人にも知られ、この方面の日本語が豊富になつたのは喜ばしい事である。

語彙の不足は名詞にばかり限らない。形容詞にも、それがある。フランス語は形容詞の豊富な事でも有名であるが、日本語は形容詞の乏しい事で有名である。形容詞は、すべて無形のもので、感覺や感情に關係して居る。形容詞の乏しいのは、日本人の精神生活の貧しい證據であると言はれたら、日本人に取つて恥辱である。日本人は決して野蠻人ではない。その精神生活は相當に豊富である。それに

も拘らず、形容詞だけは野蠻人並みなのは理由がある。一つは形容詞の發達した支那に接觸して、その形容詞を採り入れたこと、二つは日本には形容動詞といふものがあつて、「快活な」「活潑な」「デリケートな」「グロテスクな」と、何でも、ナを附ける事に依つて、外國語を日本語化する事が容易である事、以上二である。この二の原因のため、純粹の日本語の形容詞の發達は止まつてしまつた。しかし、地方には、標準語に無い様な良い形容詞が少なくない。それらを選んで標準語に採用するならば、形容詞の不足を補ふ事が出来るだらう。そして、これは方言矯正と矛盾するものではない。方言の中のある單語を標準語として採用してしまへば、それは最早方言ではないからである。世の中には、方言の撲滅に反對して、その保存を説く人があるが、しかし、方言を方言として保存しただけでは價值はほとんど無い。それを標準語に高めてこそ價值がある。方言愛護論者は必ずそこまで進まなければ不徹底である。

私は、かつて、ある醫學雜誌で讀んだ事がある。ドイツでは「痛い」といふ言葉が數種あつて、それぞれ異なる症状に使ひ分けられて居るから、診斷の上に非常な助となる。所が、日本語では、肋膜炎の様な廣い部位に亘る持續的鈍痛も、神経痛の様な狭い部位に瞬間的に起る激痛も、馬鹿の一つ覚えの様に、イタイの一點張りなので困ると。しかし、ドイツ語でも、最初から「痛い」が數種あつ

たわけではない。各聯邦の方言を醫學上の術語として採用し、それを普及した結果である。所が、日本の方言にも「痛い」が數種あつて、それ／＼適當に使ひ分けられてゐる所がある。たとへば、出雲では次の通りである。

ウツク 痛みが短い周期に起るをいふ。

ウバル 腫物に膿を生じ張り痛むをいふ。

ニガル 腹を痛めて下痢の氣味あるをいふ。

ハシル 小局部に痛が烈しく、びり／＼するをいふ。

方言を標準語に採用するには、國語審議會の様な機關で決定して貰ひたい。

x

x

x

以上は方言矯正の範圍外となるべき言葉について述べたのである。これ以外はすべて矯正の対象となる。古語といへども、これから免れる事は出来ない。然るに、世の中には、方言保存論者とも言ふべき人があつて、方言の矯正に反對し、又は反感を抱いて居る。彼等の言ふ所を聞くに、その論據は次の三點に歸する様である。第一、方言には古語が多く、國語・國文學の研究上、益がある。だから、之を保存すべしと。第二、模倣は常に本物に劣る。地方人が如何に巧に東京辯を真似ても、東京人に

は、かなはない。むしろ、方言を使ふにしかずと。第三、方言には調和の美がある。縣人の性格に調和し、單語・語法・音韻のすべてに亘つて、統一と調和とがある。なまじひに、東京辯を真似ることは、この統一と調和とを破壊し、混亂を惹き起す虞がある。

これらの反對説には、それ／＼一理ある。しかし、熟考すれば、根據薄弱である事に氣がつくだらう。第一、方言が國語・國文學上有益な資料である事はいふまでもない。だから、これを採集し、記録して、學界に報告する事は大いに推奨すべきである。しかし、必ずしも、口頭に保存する必要は無い。口頭にばかり保存されてあつても、記録が無ければ比較研究家の役には立たない。即ち、學問上重要なのは記録の有無であつて、現存の有無ではない。意識的の方言矯正運動が起らなくても、方言は永い年月の間には移る。但し、その移り變りが徐々に起る場合には、人が氣がつかないから、記録して置かうといふ氣を起す人は稀である。かくして、記録されずに消滅した方言が幾らあるか判らない。これこそ取返しつかない損失である。これに反して、方言矯正運動が起り、それが着々と效果を奏して、方言が標準語のために釐食される様になると、人々は「方言を採集するなら今の内である。この期を逸すれば、もはや永久に方言採集の機會は無い」といふ事に氣がつくから、競うて採集し、記録する様になる。だから、方言矯正運動は研究のためにも歡迎すべき事である。

第二に、模倣は本物に劣るといふのも眞實である。音聲の點では、模倣すらも容易でない。新渡戸博士は、國に歸ると、「どうだね。僕の言葉に訛があるかね」と、訛の無い事を自慢するほど、標準語に自信があつたが、その博士ですら、調音部位が浅いので、東北人である事が直ぐ判ると金田一博士は言つて居られることは前にも述べた。私の父は茶の湯の師匠である。嫁入前の娘で、茶の湯でも習はうとする程の人は、上流か中流の人にきまつて居る。だから、東京辯を使ふ。しかし、本當の東京人か否かは、襖の蔭で聞いて居て、すぐ判る。「御免下さい」といふ最初の一聲でも判る。東北人は、調音部位が浅いのと、鼻母音があるのとが特徴である。

しかし、模倣は社會の一大法則である。特に、言語は社會的共有物である以上、獨創の餘地は極度に少なく、大部分は模倣の結果である。方言といへども、その基礎は前時代の標準語の模倣に外ならない。だから、方言は大抵數縣に分布してある。一町村限りの方言といふものは少ない。その土地に發生した方言は少なく、他の土地から流込んだものゝ多い證據である。模倣は祖先以來、間斷なく續き來つた歴史的事實である。今日に限つて、この歴史的法則を拒むべき理由は無い。もし、奥羽人が東京辯の眞似をいさぎよしとしないならば、もとの蝦夷語に返る外はない。なぜなら、東北方言も亦模倣の產物に外ならぬからである。模倣に上手・下手があり、下手な模倣が聞きにくいのは事實で

ある。だから、我々は方言の矯正を完全にする様、いよ／＼巧な模倣に努めなければならない。

第三に、方言に調和の美がある事も事實である。第一、それは縣民の性格に調和する。琉球語の長音に富む事は琉球人の悠長を現し、鹿児島方言の短音と入聲は、鹿児島人の氣短かと活動性を現はす。東京に輕捷な母音の無聲化や口蓋化が發達し、奥羽に鈍重な濁音が發達したのは、皆住民の性格の反映と考へられる。又、方言には方言特有の感情があつて、愛情や親睦の表現には標準語を以て代用する事のできない點が多い。しかし、これらは反對論としては薄弱なものである。今、標準語が全國に普及されたとしても、果して、縣人性にして倔強い存在であるならば、間もなく、その標準語は、縣民の性格に従つて、或ひは重く、或ひは軽く、或ひは長く、或ひは短く發音されるだらう。言語には個人差が認められる位だから、ある程度の縣差は認めてよい。しかし、今日の方言差は、あまりに大きく、縣民性と沒交渉な部分が多い。又、方言にも美しさはあるとしても、それは東京辯の美しさには及びもつかないものである。東京は全國の文化人の集まる所だから、そこに話される言葉が悪からうはずがない。都會人と田舎人との趣味の相違は反物の色や柄の選び方にも窺はれる。田舎の人は、毒草の様な赤い色や、ペンキ塗りの看板みたいな柄を美しいと見る。都會人の好む毒草や上品は田舎の人には判らない。呉服屋の店先で示されたこの趣味の相違はあらゆる部門に表はれて居るに違ひない。

い。まして、言語は人の性格を反映するものである。方言よりも、東京辯の方が一層洗練されて居る事は争はれない。

首府の言葉は美しいとは言ひ得るが、必ずしも正しいとは言はれない。時には、訛もあり、誤用もある。古語は一般に雅語と呼ばれて重んぜられるが、しかし古語にも、やはり訛や俗語があつた。たとへば、フビト（史）はフミビト（文人）の訛である。然るに、藤原不比等の頃には、もう、フビトの方が普通であつた。蜻蛉は「本草和名」には加岐呂布とあり、「倭名抄」に加介呂布とある。どちらか一方が訛に達しない。蝶の古語はカラエヒ（唐蝶）である。所が、和名抄には「王餘魚 加良衣比、俗云加禮比」とある。また魚の古語はウヲである。和名抄に「魚 宇乎、俗云伊乎」とある。指の古語はオヨビである。「土佐日記」に「今日幾日、二十日、三十日と數ふれば、およびもそこなはれぬべし」とある。萬葉集の「秋の野に咲きたる花を指折り掻き數ふれば七種の花」の指もオヨビである事は勿論である。後世はオヨビと聞いて大指を聯想し、オを省いてしまつた。おまけにヨビをユビと訛つた。和名抄に「指、由比、俗云於與比」とある。源順はオヨビの方を俗語と考へてゐたと見えるが、これは誤である。

「伊呂波字類抄」に紐をヒボとし、寡婦をヤマメとしてある。辭書に載せる位だから、これは當時の標準語であつたに違ひない。今日、紐をヒボ、寡婦をヤマメといふ所の多いのは理由がある。安原貞室の「かたこと」は慶安時代の京都の訛を集めたものである。これを見ると、今日方言にある訛は、必ずしも地方的に發生したものではなく、京都訛がそのまゝ輸入されたものゝ多い事に氣が附く。トカキ（とかげ）メ、ズ（みみず）タノシ（田螺）カイル（蛙）ガヘル（蛙）オナギ（うなぎ）トンビ（鶯）ケツネ（狐）タノキ（狸）オホカメ（狼）シキビ（樺）ケトギ（鶏頭花）ゴンボ（牛蒡）ダイコ（大根）イビ（指）タハシン（菓子）カイ（粥）等、いづれも京都訛である。

訛は勿論矯正すべきである。しかし、こゝにも問題はある。標準語の方が訛で、方言に正しい形の傳はつてゐる場合がある。たとへば泰である「萬葉集」に寸三、「本草和名」に岐美とあつて、キミはキビよりも古い。今も、青森・岩手・秋田・出雲で玉蜀黍をキミといふ。元はもろこしをキミと言つた。新井白石の言ふ通り、キミの語源が「貴實」であるとすれば、キビこそ訛である。従つて矯正すべきである。所が小學校の讀本にはキビダンゴとある。キビは標準語である。だから、キミの方を矯正しなければならぬ。こゝに矛盾がある。教育家は、この矛盾に當面して惑はざるを得ないだらう。「標準語を教へよ」は無條件に眞理である。だから、キビはたとへ訛であらうとも、之を教へるに躊躇する必要はない。問題は一方的である。即ち、方言のキミをどうするかである。もし、「キミは正しいから……」と言つたとすれば、その教師はうそを教へた事になる。「キミはよその國には通らないから……」と言へばよい。方言を矯正するのは、それが他に通用しないからであつて、必ずしも不正なためではない。標準語を教へるのは、それが全國に通用するからであつて、必ずしも正しいためではない。この點を誤解しない様に願ひたい。

x

x

x

言語の教育には、理論と練習とが共に必要である。日本の教育は、とかく主知的であつて、練習を輕んずる弊がある。たとへば、大學を終へても、英語で話が出来ないといふのは、全く會話練習の機會に乏しいからである。日本語も同様である。中學生位になれば、標準語の知識だけは相當に備はつてゐる。作文も立派に書く。所が、會話の方はまるでダメである。方言でなら雄辯な人も、標準語での會話となると、急に訥辯になる。會話は技術である。技術は練習によつて上達するものである。

知識だけではダメである。さういふ意味で、中等學校に雄辯科を設ける必要があると思ふ。小學校には話し方科がある。近頃は、この科を缺く學校があるが、これは以ての外である。思ふに、話し方を童話の時間と見る考へ方が、この科を輕視するに至つた原因であらう。東京の小學校なら、話し方を

童話として取扱つてよいが、地方ではこれを會話の時間として、方言矯正に主眼を置かなければならない。児童を教壇に立たせて、任意の童話を語らせるなどは、必ずしも必要がない。かうすれば、話の筋を請記して来なければならぬから、頭の悪い子は忍避する様になる。話し方科は、記憶力を養成するのが目的ではないのだから、このやり方は本筋を外れて居る。正しいやり方は、教師と児童との對話にある。教師が問を出して、児童に答へさせる様にする。問の内容は何でもよいが、なるべく児童の興味をそゝる様な事柄を選ぶがよい。或ひは児童同志對話させるのも面白い。

方言矯正はあらゆる機會を利用してやるべきであるが、特に、話し方・綴り方・読み方の時間を利用するがよい。綴り方は一年生の時は方言の混入を強ひて答めるに及ばない。それよりも、むしろ、自由に創作能力を延ばす事に主眼を置くべきである。あまり早くから、方言を答めると、かんじんの創作能力がいぢけてしまふ。しかし、四五年生以上は、方言が一語も混入しない様に指導すべきである。これに關して、参考となるべき調査がある。それは兵庫縣加古郡氷丘小學校の調査である。「私は鶏です」といふ題を與へて、作文を作らせ、その全語彙をカードに取つて、方言と標準語との割合を統計したものである。その方法は、例へば、總語彙二七〇語の内、方言七二語、標準語一九八語あるとすれば、標準語一九八語を總語彙二七〇語で割つた七割二分を標準語近似率とする。これを學年別、

男女別に行ふ、六百三十八名について調査した結果によれば、名詞については、男女とも、一年生は甚だ成績が悪く（つまり方言が多く）、二年生になると、飛躍的に方言が減少する。それから、男の兒

名	詞	副	詞	形容詞		動詞等		平		划
				女	男	女	男	女	男	
尋一	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹
尋二	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹
尋三	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹
尋四	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹
尋五	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹
尋六	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹
高一	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹
高二	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹

にあつては、五年生になる時に、また一段の飛躍がある。形容詞に於ても、男の兒は一年生と二年生とでは格段の相違がある。しかし、副詞は漸進的である。一般に、副詞・形容詞が低率（即ち方言が

多い)であり、代名詞は最高率である。五年生以上はさしたる變化が無い。男の兒よりも、女の兒は高率である(即ち標準語に近い)。入學當初は、ライコン(大根)ダシキ(座敷)等の訛音が非常に多く、異系統の方言と半々になつてゐるが、三年生になると、異系統の方言五十語に對し、訛音二十二語と減少する。以上は、比較的標準語に近い(但し訛音は多い)播磨での調査である。他の地方ではどうなつて居るか、知りたいものである。

x

x

x

方言を矯正するためには、方言の知識の必要なることは勿論である。しかし、この點については、大分、誤つた考が行はれて居る様である。第一、方言は間もなく矯正され、消滅してしまふべきものだから、之を研究するのは張合が無いといふ考。これは、敵はやがて滅ぼされてしまふものだから、敵狀を偵察する必要がないといふのと同様である。敵狀を明にせず、どうして戦をすることが出来る。これでは、敵を滅す代りに、味方の軍が減されてしまふ。明治三十五六年頃にも、方言矯正運動が盛んであつたが、それから三十四五年を経た今日、方言は依然として存在する。その勢は昔ほどではないかも知れないが、強敵である事は明である。十分、敵狀を明にし、策戦計畫を建てなければ、勝利を得る事はおぼつかない。中には、方言を卑しむのあまり、方言研究まで卑しむ人があるが、し

かし、世の中には、癩病・花柳病・犯罪・淫賣婦・毒藥・狂人等を研究して居る人がある。その對象が、或ひは汚く、或ひは恐ろしく、或ひは憎らしいにしても、その研究の目的が人生に有益である限り、尊むべきである。方言の研究には、方言矯正その他數個の效用がある。だから、對象が卑近であるからと言つて、研究そのものを卑しむのは大きな誤である。また中には、自分の郷里の方言に關する限り、隅から隅まで知つて居る、従つて、これ以上、方言を研究する必要が無いと考へてゐる者がある。これは恰も、自分は自分の町の地理だけは良く知つて居るから、地理學者だと言ふに等しい。學問の第一歩は比較である。自分の村の方言を知つて居るだけでは比較のしようが無い。それは資料として意義があるが、未だ學問とは言はれない。その上一町村の方言は千語止まり、最も多い所で一千五百語止まりである。全國の方言は、重複を除いて、十萬以上あらうと思はれるのに較べれば、百分の一度度である。又、中には、自分の郷里の方言に關して、他縣人の説を聞くのは馬鹿々々しいと考へてゐる人もある。しかし、地理學に於ては、他縣人の講義でも喜んで聞くではないか。

世人は方言について、恐ろしく無知である。いつかの東京朝日新聞を見ると、アイヌ人の使ふ日本語に、方言的訛を持たせる目的を以て、助動詞ジャを使はせて居た。ジャが關西系の語法であるといふ方言學の初歩的知識(普通の文法書にも書いてある)すら、一般人には缺けて居る證據である。

私が小學生の頃は、「東北人の發音が不明瞭なのは口の開き方が足りないからだ」といふ説が行はれて、子供に口を大きく開かせる練習をした。子供等は、西瓜でも食ふ時みたいに、口を大きく開けて、ア、イ、ウ、エ、オと息を出して、それで發音の矯正が出来たつもりでゐた。これは大きな誤である。東北人の發音の不明瞭なのは、母音の調音部位が浅いからである。口の開き方の大小とは關係が無い。右は、方言學の正しい知識が無ければ、方言矯正は効果をあげる事が出来ないといふ一例になる。

方言に關する知識を與へるため、師範學校に方言科を設ける必要があると思ふ。師範生は、將來訓導として、方言矯正の第一線に立つべき闘士である。それが方言に關する知識無くして卒業するといふのは、鐵砲を持たずに戦場に出ると同様である。

方言學概論終